京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2012. 冬

こごみ日和

54号

お気に入りの色、お気に入りの素材。

お気に入りの服に出会えたら、それだけで毎日が楽しくなる。

色褪せたぐらいじゃ、捨てられない。

大好きな服と過ごした日々の想い出は、決して色褪せないのだから。

1000 年以上もの歴史をたたえた草木染めの衣服。

植物の生命のしたたりが、色彩となって、人々の身体をやさしく包みこむ。

着ごこちのよい服は、新しい世界への翼。

染め直せば、大地の恵みに感謝する気持ちが、きっと蘇える。

写真　吉村　智樹

特集
「染め重ね無料サービス」が、お客様との絆を結ぶきっかけに
染め重ねて、再び着る。草木染めが教えてくれるシンプルライフ

植物が生みだす尊い色彩の世界

いにしえの時代から、人々は大地の恵みである植物で布を染め、身を包んできました。草木染めのはじまりは、はるか先史時代にまでさかのぼると言われています。そして京都では794年の平安京遷都を機会に絹の布が盛んに織られるようになり、それらの着色に植物染料が用いられていたことが遺物などから明らかになっています。植物を煮て抽出された色は神秘的であり、時には「階級」「位」を意味するほど重要で気高いものでした。

若者に大人気　草木染めのカジュアルファッション

そんな、古来より草木染めの技法が受け継がれてきた京都に、いまたいへんな人気を誇る、一軒のアトリエショップがあります。京都御所の南に位置する、築およそ70年というハイカラな外観の洋館。こちらの２階に工房を構えるのが、その名もストレートな「手染メ屋」。細い階段をのぼると、植物を煮出す野趣あふれた香りに包まれます。そして店主である青木正明さんと、番頭と呼ばれる奥様の智子さんが笑顔で迎えてくれます。

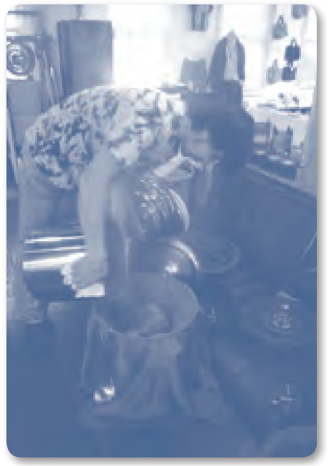
2002年７月７日、七夕の日にオープンしたこの手染メ屋さんは、ショップと工房が隣り合う構造になっており、染色の作業をお客さんが目の当たりにできるのが特徴。まるでオープンキッチンのレストランのよう。大きな寸胴鍋がいくつも並ぶ様子は壮観。植物染料ならではの複雑でやさしい色目をした衣料品や小物は、こちらの工房で染めあげられ、できたてがそのまま店頭に並べられます。そして置かれているアイテムは和服ではなく、Ｔシャツやパーカー、スカートやパンツ、ストールやバンダナ、さらにはバッグやスニーカー！　意外にも、カジュアルな洋の装いです。

「太古の昔からある天然染料のよさを、いまの時代に伝えたい。だから僕はＴシャツやパンツなど軽衣料にこだわるんです。草木染めは日本古来から続く素晴らしい文化だと思います。だからこそ逆に手が届かない『作品』にしちゃいけない。現代に受け継ぐためには、普段から着られる、当たり前の服でないといけないと思うんです。だから、できるだけ安く、誰もが買えるものを作っています」と青木さんは言います。

合成染料では表せない深奥な色あい

豊潤なカラーバリエーションには驚かされるばかり。Ｔシャツ一枚にじっくり３～４日の時間をかけて丁寧に染め上げるとのこと。人工の合成染料では表すことができない素朴な色あいに、心が癒されます。手染メ屋さんが使用する染料は、藍、茜の根っこ、柿渋、五倍子の虫こぶ、柘榴の皮、矢車附子などなど、植物を中心とした、和漢の生薬にも使われる天然の素材。これらの破片をコトコト煮こんでスープを作り、たとえば茜なら米酢といったように、ミネラル分を含んだ多種の液体や粉末と混ぜ合わせるのです。これによって化学反応を生じさせ、さまざまな色彩をうみだしてゆきます。赤い柘榴が、布を染めると、なぜか黄色になるから不思議。さらに鉄さびを加えると、きれいなグリーンに変化するなど、植物のマジックに魅せられます。そして青木さんはこういった技術を、惜しげもなく一般向けに無料で教示してくれるのです。

「早い者勝ちなんですが、週に一日だけ、僕が空いている時間と合えば染め体験をしていただけます。先ずはお電話かメールでご相談ください」とのこと。



東京大学医学部から染め物の道へ

こうして染色の仕事に日々いそしむ青木さんは、実は意外な経歴の持ち主。なんと東京大学の医学部のご出身。高校時代から心理学に興味を抱き、臨床心理学を勉強するため東京大学へ進学。保険学科で精神衛生学を研究するうち、興味は人間の身体を包む衣服へと移っていったのだそう。そして卒業後に誰もが知る女性向け大手ファッションブランドに入社。そこでの営業企画を通じて出会った草木染めの世界に衝撃を受け、染め物の道を選ばれました。

「心を奪われたのは、やはり色ですね。古代に生まれたものなのに『古い』とか『懐かしい』なんてまったく思わなかった。それどころかその色合いには、僕が好きだった海外の最先端ブランドのものと同じような新しさを感じ、ショックをおぼえました。そして、植物が生んだ色であることにも驚きでしたね。僕は草木染めは伝統工芸という観点だけでは語れないと思っているんですよ。発色に関して未だにわからないことの方が多いし、まだまだ試行錯誤の連続。これから新しい色が生まれる可能性だってある。布地の素材が変われば、染まる色も変わってくるし。先人たちの知恵と経験を重んじながらも、新しいことにチャレンジができる世界なんです」。

「染め重ね無料サービス」で蘇る色と人間の絆

風雅なおもむきと、まだまだ進化してゆくポテンシャルを秘めた草木染めの世界。そして年月を経るごとに、彩りが褪せてゆくのもまた天然染料の妙味。とはいえ「買った当時の色でもう一度着たい」「着慣れたＴシャツを、このまま“ごみ”にしたくない」と思う方もきっと多いはず。ご安心を。この手染メ屋さんでは、なんと「染め重ね無料サービス」を行っているのです。

「お買上げの品が色変わりしたら、無料で何度でも染め重ねするアフターサービスを行っています。また、元の色のほか、別のお好きな色に変更することもできます。こちらもまた無料なんです」。

一度買った商品を無料で、しかも幾度も染め重ねしてくれるサービスは、おそらく全国の工房やショップを探しても、極めて珍しいアフターケアでしょう。もったいないの精神、ごみを出さない暮らしの大切さを、大自然の息吹が教えてくれたような気がします。

「Ｔシャツなんかは根気よく着ていただければ、１枚で何色も楽しむことができます。このサービスを始めたとき、周囲から『そんなことをやって経営は大丈夫なのか？』『染め重ねに応じるあまり忙殺されて仕事にならないんじゃないか？』と反対の声があったんです。でも、３年も４年も経って、穴が空いていてもアイテムを捨てずに持っていてくださるなんて、ありがたいじゃないですか。しかも、もう一回染めてでも着たいというほど気に入っていただけて、染め屋としてこんなに嬉しいことはない。そして、染め直すことで、お客さんとつながりが絶えない。ずっとおつきあいができるんです」。

「染め重ね無料サービス」は「Reduce（リデュース）：ごみを減らす」「Reuse（リユース）：繰り返し使う」の好例であるのみならず、「Relation（リレーション）：つながり」の芽生えをも感じさせてくれました。

名称●手染メ屋
住所●〒604-0983
京都市中京区麩屋町通夷川上る笹屋町456-2F
電話●075-211-1498
営業●11:00～19:00
定休●日曜・第二第四月曜・年末年始・お盆（祝祭日は営業）
URL●http://www.tezomeya.com/

取材日：平成24年10月17日　取材・写真：吉村　智樹

シリーズ
みんなで考える

物には生命がある だから、直し、よみがえらせる

京の暮らしの基本としたい
～京のお直し屋さん紹介サイト「もっぺん」より～

「物にも生命はあるのんえ」とのお母さんの言葉を大切に、大村しげさん(*)は、81歳で亡くなるまで京の暮らしを随筆に綴った。

2007年に立ち上がった、京のお直し屋さん紹介サイト「もっぺん」は、大村さんの心を受け継ぐものでもある。買っては捨てるという、消費のかたちが定着するなか、物を大切に思い暮らす人がいる。その思いを汲んで、壊れ、傷つき、使えなくなった物を修復し再生する人がいる。そんな京都の町の一コマを追った。

陶磁器の修理、「金継ぎ」の技

割れ、欠け、ヒビ、シミ…。國本美紀さんの元には、京都市内はもちろん遠方からも傷んだ器が持ち込まれる。陶磁器の割れ目を漆でつなぎ、金で繕う技は「金継ぎ」と言われ、日本には室町時代から伝わる。國本さんは、器の痛みを感じ、修理法を探り、金のほか、器に合わせて顔料で白、黒なども用いる。傷みを補った技が意匠となり、趣を放つ器。修理とは、「元の姿に戻すこと」ではない「新たな命を宿らせる」こと。漆や金など、必要な材料がすぐに手に入る「京都だからできる」と言う國本さんの「金継ぎ」はクチコミで広がり、器に思いを寄せる人々からの依頼が相次ぐ。傍らには修理を待つ皿、茶碗、壷などが並べられていた。

漆で割れ目を補う、國本さんの手

「STOCKROOM」ストックルーム
TEL／FAX 075-212-8295
〒602-0855
京都市上京区西三本木通荒神口下ル上生洲町229-1
かもがわカフェ１階奥

時計修理に最善を尽くす

時計修理ひとすじ96年間、勝屋には、名だたるブランドの腕時計、柱時計、置時計、ホール時計などが持ち込まれる。修理を施し、再び時を刻める状態にした時計は数知れず。超音波洗浄機、精密旋盤などが並ぶ技術室では、一級時計修理技能士４名が技を振るう。わずか直径３センチ、厚さ数ミリの腕時計、中を開けると100種類以上の部品で成り立つ。修理は、まず全体をチェックし、内部を分解し、洗浄、汚れ落とし、研磨、整備、テストなどの作業を行い、歯車など部品の摩耗、ゆがみは修復または部品交換する。「どんな修理にも最善を尽くす」という。修理は、技だけではできない、心があってこその行為なのだ。

高度な技を施す、時計修理技能士の手

株式会社 勝屋　TEL 075-221-0819／FAX 075-255-0869
〒604-8083 京都市中京区三条通富小路東入中之町33

（*）▷大村しげ（おおむら しげ）
料理研究家・随筆家。1918～1999年。京都生まれ。京都女子高等専門学校（現・京都女子大学）に入学し、姉小路の借家に住む。京の暮らしや、京都の家庭料理「おばんざい」に関する執筆など多数。

カバンの修理、まず発想から

京都駅近くのとある店。カバン屋さん？と覗くと、奥ではミシンを走らせる人、金ノコを手にする人…。棚には、革、布や工具類が並ぶ。カバンの修理を請け負う「明石屋」の創業は明治35年、もともと馬具商として、京都の三大祭り、葵祭などを支えてきた。旅行者が傷ついたスーツケースを持って駆け込んできたとき、馬具の技術で応急処置を施したことがきっかけでカバンの修理を始めた。「ファスナーが傷んだ」「破れた」などの依頼に対し、「どう直すか」という発想で全体を見つめ、強度、使い勝手やデザイン性に配慮し、相談しながら修理を進める。依頼者それぞれのカバンへの愛着を汲み、「傷んだら何遍でも持ってきてくれはったらよろし」との心意気で応じる。

材料を選び適切な修理を行う、明石店長の手

カバンの病院 明石屋
TEL 075-371-6797／FAX 075-371-6800
〒600-8216 京都市下京区東洞院塩小路東入る547

扇子修理、伝統の技を誇りに

「ぼろぼろになった扇でも修理する」と、修繕に励む、三代目の中西潤吉さん。風を送り、涼を得るほか、儀式や芸能などに活用される扇。その歴史は奈良、平安に遡り、京都は一大産地として技を集積してきた。竹や木からなる骨に和紙や布で扇面を貼付け、要で止めた扇の構造は繊細で、トラブルが多く、傷みの状況は一扇ごとに異なる。京扇には、全国から「直して」と、破れ、折れた扇が届く。必要な材料も幅広く揃え、相談しながら対応。依頼人の扇に託す思いは、「価格の高低には関係ない」と、引き受ける。かつて隆盛を誇った京扇子だが、今では、主たる生産拠点は他国にある。骨に糊付けする中西さんの手から、秘めた思いが伝わってきた。「お直し」が新たな活路につながればと願い、工房を後にした。

扇子修理に活路を、と願う、中西さんの手

なかにしや京扇
TEL 075-561-2988／FAX 075-561-8010
〒605-0931 京都市東山区大和大路西入る茶屋町509

漆器の修理、創造意欲で臨む

100いくつもの工程を経て作られる漆のお椀や重箱…。時が経てば、欠けたり、剥げたり、蒔絵の変化などの傷みが生じる。修理に技を振るう舟越一生さんは、「おもしろい」ととらえ、創造意欲を湧かせる。木地、塗り、蒔絵、金工など、すべての工程に精通し、確かな技と温度や湿度などの管理能力も重要だ。舟越さんは、彦根漆の四代目であり、漆芸家としても活躍、螺鈿を用いた作品などで数々の栄誉に輝いている。

漆は、縄文時代に利用され、奈良時代には漆器や仏具、建造物にと用いられ、その後発展を遂げてきた。舟越さんは傷んだ漆芸品と対話し「新たな意匠を施す」気概で修理に取り組む。

漆の「塗り」作業中の舟越さんの手

迦陵頻（かりょうびん） 附属京都漆芸修復研究所
TEL 075-533-6662／FAX 075-533-6160
〒605-0822
京都市東山区下河原通八坂鳥居前下る上弁天町440-1

お直しという仕事に携わる５人の方々に共通するのは、依頼者の思いに共感し、より魅力的にするために技を尽くしたいという真摯な姿勢、そして創造性だ。2R型エコタウンを目指し、「もっぺん」サイトの立ち上げに尽力した野村直史（京都市ごみ減量推進会議事務局）は、「直す」「よみがえる」という仕組みが消費のかたちの一つとして、定着すればいいと、夢を抱いている。この町でなら、夢に近づくことができるはず。人と物、物と人、お互いが支え、支えられている「命」ととらえる伝統が京都にはあったのだから。

京のお直し屋さん紹介サイト「もっぺん」 http://www.moppen-kyoto.com

取材執筆：森田知都子

参考資料：『しまつとぜいたくの間　ゆたかな暮らしのエコロジー』大村しげ著　1993年　佼成出版社

企業向けごみ減量実践講座

「元産廃Gメン石渡正佳が産廃問題を斬る。その後……」

去る９月21日(金)に、著書「産廃コネクション〜産廃Gメンが告発！不法投棄ビジネスの真相〜」で知られる千葉県職員 石渡正佳さんをお招きし、「元産廃Gメン 石渡正佳が産廃問題を斬る！その後……」と題して「企業向けごみ減量実践講座」を開催しました。当日は、京都市内だけでなく市外からの参加もあり、おおよそ50人の参加者が熱心に石渡さんの話に聞き入っていました。不法投棄をいかに根絶していったか、実際の現場を知る石渡さんならではのお話を、ほんの一部になりますが、ご紹介します。

石渡正佳 氏▲

不法投棄のさまざまな側面

石渡さんが産廃行政担当になった当時、環境省の統計では全国の不法投棄量が年間40万トン（実際にはもっと多いと石渡さんはいいます）、そのうち千葉県が18万トンと言われていました。千葉県は何をやっとるんだという批判の中で、処理業者同士の過去の取引関係を会計帳簿などから探るなどして、廃棄物の実際の流れを辿るといった新たな手法を次々に取り、不法投棄の撲滅を達成していきます。

「不法投棄にはさまざまな側面があります。不法投棄というからには、もちろん①犯罪・法令違反なわけです。また不法投棄は②環境汚染の原因にもなりますが、これは浄化しないといけない。ちなみに香川県の豊島の場合、撤去と後処理に数百億円かかります。不法投棄の罰金は、たとえば法人なら３億円ですが、全然足らないわけです。撤去したからといって汚染された環境が元に戻るわけではない。だから未然に防ぐことが必要になるわけです」。

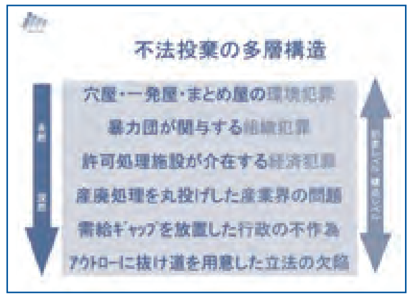
多くの不法投棄現場を見てきた石渡さんの実感がこもります。石渡さんは続けます。「また③必要悪という側面もあった。発生するごみ量と産廃業界全体で処理できるごみ量に差があれば、あぶれたごみをどこかに持っていかなければならない。その行先が不法投棄現場になる。さらに廃棄物が④マイナス資産であるという点。捨てられればよいので、どうしても安い方に流れてしまう。さらに不法投棄は⑤地域格差でもあります。都会から田舎へ。先進国から発展途上国へと流れやすい。これを解決するには域内処理の考え方に立たなければならないでしょう。この５つの側面のうち①は警察の仕事ですが、残りはすべて行政の仕事になるわけです。環境への影響を考えれば、不法投棄が起こった後では遅い。その意味で、未然防止ができる行政が頑張らないといけない」と、不法投棄の未然防止とその役割を担う行政の重要性を訴えます。

不法投棄の諸相

1. 不法投棄は犯罪（法令違反）である
2. 不法投棄は環境汚染の問題である
3. 不法投棄はマテリアルバランス不均衡の問題である
4. 不法投棄は廃棄物＝マイナス資産の問題である
5. 不法投棄は地域格差の問題である

不法投棄はなぜ起こるのか？

不法投棄がなぜ起こるのか。誰が悪いのか。この問いに対する石渡さんの答えは、それほど単純ではありません。もちろん不法投棄に関与した業者（許可業者であることもしばしば）、あるいは穴屋、一発屋、まとめ屋といわれるような不法投棄に関わる、いわば裏稼業の人たちの責任であることは当然でしょう。しかし、そこには構造的な問題もあると石渡さんは指摘します。



「実行犯やコーディネーター役、これらに関与する暴力団、ごみを不法処理ルートに流す許可業者の存在。これらはすべて犯罪として検挙が可能ですが、不法投棄が起こる原因としては表面的な話にすぎません。構造的な問題として、発生ごみ量と処理量のギャップを放置した行政の責任、さらに、そもそもアウトローに抜け道を用意した法律の欠陥も指摘しなければなりません」。

いっぽうで、発生する不法投棄や、その関係者を放置するわけにはいきません。警察頼みにはせず、ごみがどういったルートでやってくるのか、不法投棄現場で何時間もかけて、証拠探しをするといいます。

「不法投棄現場からは、伝票や商品ラベルなど様々なものが出てくる。そこから、排出事業者と処理を請けた収集運搬業者や処理業者を一つ一つ調べていきます。みんな、適正に処理し契約も結んでいると話す。でも、もし本当にそうなら不法投棄は起きないわけです。どこかから不法処理、いわばアウトロー処理に流れている。実際に排出事業者が適正に処理契約や産業廃棄物マニフェスト伝票の発行を行っていても、途中からアウトロー処理に流れ不法投棄される事例もある。よく排出者責任ということをいいますが、この構造を排出者が自分で調べるのは相当に難しい」。

石渡さんの建前ではない話からは、適正処理を確保していくことの難しさがよくわかります。

ごみから資源へ―循環ビジネス激動の時代

この10年間、循環ビジネスは激動の時代であったと石渡さんは話します。「2000年までは、ごみは不法投棄されるような時代でしたが、そのあと2006年ごろには資源物の価格が高騰。皆様も記憶があると思いますが、古紙や金属類の窃盗が多発しました。たった６年で捨てる時代から盗む時代になったと言えます」。

グローバルな経済環境の中で資源価格は乱高下を繰返し、廃棄物業界もその波の影響を受けずにはいられません。国内でリサイクルした方がよいか、海外に売りさばいた方がよいか。グローバルな市場経済の状況は、廃棄物がどこに流れていくかということと密接に関わっています。

産廃の適正処理を進めるために

石渡さんは、不法投棄の未然防止を防ぐための具体的な手法の開発にも着手しています。優良な産業廃棄物処理事業者の判別法「iメソッド」は、環境省の優良事業認定制度などで公表されている情報を使って、優良な処理事業者を判別する方法を提供しています。また、開発中の産業廃棄物処理電子マニフェスト伝票システム「iマニフェスト」についてもお話がありました。

その他にも、東日本大震災のがれき処理の実際についても、現地を歩いた経験からのお話がありました。「現実は、テレビや新聞で報道されている内容よりもっと厳しい。本当に大変な状況であった」という言葉が耳に残ります。　（執筆：齋藤友宣）

石渡さんの著書「産廃コネクション」のノーカット版やコラムなどはI-Method Forum < http://i-method.info/ > に掲載されています｡御興味がある方はぜひサイトもあわせてご覧ください。

次回企業向けごみ減量実践講座のご案内

１月22日（火）京都市中央卸売市場ミニツアー

２月８日（金）企業の３R行動 簡単見える化講座（仮称）

＊詳細はウェブサイト又は事務局へお問合せください。（075-647-3444）

事務局より ● **イベント報告**

北野エコチケットキャンペーン

11月5日～11月28日

当会議の「エコ商店街事業」として開催しているイベントで、今回5回目。北野商店街の44店舗のお店で、レジ袋を断る、古着を持ってくるなど各店の定めたエコな取組をすると、エコチケットがもらえるキャンペーン。5枚でエコグッズが当たる抽選会には、1000人近い方が参加！古着も、790kg集まりました。

今回は、古紙や電池類の回収も、期間中に2回実施！ あわせて700kgが集まり、レジ袋の削減などもあわせると、約1.6トンのごみが減量できました。

次回は2月頃を予定

やんちゃフェスタ　10月27日

「梅小路公園に児童館がやってくる！！」をキャッチコピーに、毎年盛大に開催される「やんちゃフェスタ」。今年も多くの家族連れや、児童館の子どもたちで賑わいました。

当会議のブースでは､「ペットボトルのリデュース」「生ごみの水切り」「雑がみの回収啓発」「めぐレットの啓発」に関する展示とクイズを行い、500人を超える方々に参加いただきました！

日本人一人当たり、1年間で約200本のペットボトルを使っていることや、麦茶パックを捨てる時に、ギュッと絞ると30g程度の水切りができることなどの展示を見て、参加者から「知らなかったわ｡」「勉強になったよ！」と感想をいただき、とても充実したイベントとなりました。

企業向けごみ減量実践講座「大津板紙ミニツアー」　11月6日

企業会員さんを主として開催している企業向けごみ減量実践講座。ミニツアーを含め、年に4回行っており、今回は2回目。日頃から「秘密書類リサイクル事業」でお世話になっている大津板紙株式会社を訪問し、秘密書類も含めた古紙リサイクルの流れと、環境への取組について、講義と工場見学を行いました。紙以外のものが混入した場合の悪影響に納得し、製造工程での排水処理やコージェネレーションへの取組に感心した、大満足のミニツアーでした。

こぼればなし　シュレッダーにかけた紙は原料としては使えなくはないけれど、運搬の際に破片が飛び散って、街を汚すこともあると伺いました。秘密書類はシュレッダーにかけずに、当会議の「秘密書類リサイクル事業」を御利用ください！

「困ったときは、お互い様」皆で連携し、助け合うことが、パワーの秘訣！

～山階学区地域ごみ減量推進会～

「いつも、おおきに」「ごくろうさん、ありがとう」ＰＥＴボトルなどに入った使用済てんぷら油を介して、あたたかい言葉が交わされます。

山階学区地域ごみ減量推進会（以下、山階ごみ減）の使用済てんぷら油の回収は、毎週火曜日。マツヤスーパー三条山科店の開店と同時に回収が始まります。多い時には、１日で20リットルのポリタンクが３個分も集まり、年間の回収量は2,000リットルに迫ります。

地域と事業者の連携

山階ごみ減は、平成17年３月から活動を始め、８年目。伊藤会長を中心に、山階自治連合会の住友会長の率先垂範のもと、地域内の各団体と連携して、活動しておられます。

当初、油の回収は、女性会の役員さん宅前などで行っていましたが、回収量が増えません。なんとかよい方法はないかと皆で知恵を絞り、「少しでも持ってきやすい方法」としてでてきた案が、スーパーに買い物に来る人にアピールする方法です。

そこで地元の「マツヤスーパー山科三条店」に協力をお願いしたところ前向きなお答えをいただきました。さっそく、回収時に人が常駐することや、敷地を汚さないこと、さらに、ペットボトル等の持参容器を受取り自分たちで処理する、回収時間をスーパーの開店時間に合わせるなど、市民目線でルールを作り実現させました。また、回収の際には駐輪スペースの整理や道案内など、事業者への配慮も相まって、地域と事業者が互いに気持ちのいい関係を築いています。はじめは回収量が増えるか不安だったそうですが、飛躍的に伸びました。

この取組を陰で支えているのが、区役所の『エコまちステーション』。活動を続けるための相談や、他の地域との情報交換の窓口として活動をバックアップしています。

困ったときはお互い様

スーパーでの回収開始当初は、自治会の回覧で回収の案内をしましたが、今は回覧板等での案内は年２回、お盆とお正月にかかるお休みのお知らせだけ。毎週決まった時間に活動を継続することによって、口コミや、実際に回収の様子を見た人たちが、持ってきてくれるようになりました。油を出す側としては、毎週実施される安心感は非常に大きく、まさに継続は力なり。

ただ、暑い日も寒い日もあり、毎週回収するスタッフの心構えは相当なものではと伺うと、回収は、だいたい同じメンバー５～６人で対応しているが、他の用事があったら、そっちを優先するよう声をかけあっているとのこと。「無理のないように。困ったときはお互い様です」と伊藤会長。それが継続の秘訣のようです。

また、回収タンクの口に置かれた「おおきめの漏斗」も、地域の仲間の手づくり。ペットボトルを逆さにして置けばトックントックンと油が落ちていきます。安定するため、油が跳ねて地面を汚すことも少なくなり、効率の良い優れものです。

地域活動のひとつとして

油の回収が始まる前は、小学生の通学を見守る『見守り隊』の活動を行い、午後からまた地域の会合と、お忙しいながら、「使用済てんぷら油回収の活動も、あくまでも地域づくりのひとつ」と、伊藤会長は生き生きとしておられます。

地域の人からの「ありがとう」という言葉が、伊藤会長をはじめ、活動する皆さんのパワーとなり、また地域の力になっているのですね。

取材日：平成24年11月13日

取材：藤田　一美

京都市ごみ減量推進会議会報誌　こごみ日和 No.54

〒612-0031　京都市伏見区深草池ノ内町13
京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971
E-mail: gomigen@mbox.kyoto-inet.or.jp
URL: http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/index.html

京都市ごみ減量推進会議　検索　で検索できます

【入会のご案内】

京都市ごみ減量推進会議は、京都市のごみを減らし、環境を大切にしたまちと暮らしの実現に寄与することを目的として、市民団体、事業者、行政により1996年11月に設立した団体です。パートナーシップで多彩な活動を展開中。当会議では、ともに活動する会員を募っています。

詳細は、事務局へ問い合わせください。TEL:075-647-3444

企画編集：京都市ごみ減量推進会議　普及啓発実行委員会
（会報誌・ホームページ小委員会）

古紙を含む再生紙に大豆インクで印刷しています。 PRINTED WITH SOY INK